



## 「優しい心」



みなさん、こんにちは。

この夏、久し振りに『夕焼け』という詩を読み返してみました。人の心の優しさを歌ったこの詩は、いつ読んでも、読者に静かな感動を呼び起こすのではないかと思います。

満員電車に座っていたある娘が登場します。満員電車の中、二度も娘の前にお年寄りが押し出されるようにして立ち、そのたびに娘は席を譲っていたのですが、三度目にはとうとう席を立たなくなります。その時の娘の心情と、それを見ていた詩人の感想が平易な言葉で綴られていくのです。

.....

可哀相に。／娘はうつむいて／そして今度は席を立たなかった。

次の駅も／次の駅も／下唇をギュッと噛んで／身体をこわばらせて……。

僕は電車を降りた。

かたくなってうつむいて／娘はどこまで行つたろう。

やさしい心の持主は／いつでもどこでも／われにもあらず受難者となる。

何故って／やさしい心の持主は／他人のつらさを自分のつらさのように／感じるから。

やさしい心に責められながら／娘はどこまでゆけるだろう。

下唇を噛んで／つらい気持ちで／美しい夕焼けも見ないで。

よしのひろし  
(吉野弘『夕焼け』)

優しい心の持ち主は、その優しさ故に、人一倍辛い自分と対峙することになるのです。夕方の満員電車の娘の心の優しさに、読者はエールを送りたくなるのではないのでしょうか。

今の時代に必要なのは、心の優しさなのだと改めて考えます。しかも、その優しさは、相手の立場や相手の心情を考える優しさです。その優しさが人々の心にあるならば、いたずらに相手を傷つけ合うことや、自分だけ図々しく振舞うことの愚かさを恥ずかしく思う気持ちが、人々に起きてくるのではないのでしょうか。

これから、秋。落ち着いた考え深い季節がやってきます。みなさんの生活の中で、心の優しさを大事にした時間をぜひ取ってほしいと思います。他に優しくすることは、実は、他から優しくされることになるという自然の摂理せつりのようなものを感じながら。